2020 年度第１４回女子美ミラノ賞報告書

派遣期間：2022 年 2 月 23 日～2022 年 8 月 23 日

青柳緑

はじめに

この度は、第 14 回女子美 100 周年記念大村文子基金 女子美ミラノ賞を受賞させて頂き誠に有難うございました。このような大変貴重な機会を与えてくださった大村智先生に心より御礼申し上げます。
また、コロナ禍の大変な時期の派遣をサポート頂いた女子美術大学の小倉文子学長はじめ担当者各位並びに、女子美同窓会ミラノ支部、ブレラ国立美術学院の清水哲郎教授に深く感謝申し上げます。

私は子供の頃からイタリアで絵画を学びたいと思い続けていましたが、女子美ミラノ賞で実現できたことを大変嬉しく思います。イタリアで触れた美術、建築、ファッションなどの芸術は、自分が想像していた以上に素晴らしいものでした。ミラノでの半年間は、これまでの作品、これからの制作を考える上で大変重要な期間となりました。また、海外から女子美を眺める機会を得たことで、母校の魅力に改めて気付くこともできました。ブレラ国立美術学院で様々な国の学生と交流するなかで、女子美の魅力をもっと世界中の人に知ってもらいたいという気持ちが芽生え、私にも何か出来ないかと滞在中考えていました。今後、後輩の後押しができるように、また母校への恩返しができるように精進すると共に、より一層、女子美術大学が世界に向けて発展していくことを願っています。

コロナ感染症のパンデミックにより、当初の予定から一年半後の出発となりましたが、無事に派遣期間を終えられたことを大変嬉しく思います。ここに半年間の滞在報告をさせて頂きます。

■略歴

女子美術大学短期大学部造形学科絵画コース 卒業(1998)
女子美術大学短期大学部専攻科絵画 修了(1999)
女子美術大学短期大学部絵画研究生(1999－2000)

女子美術大学短期大学部造形学科美術コース研究室　専任助手(2014.4-2019.3)
女子美 100 周年記念大村文子基金　女子美ミラノ賞　受賞(2019)
ミラノ派遣・ブレラ国立美術学院 在籍(2022.2 月-8 月)

所属
春陽会会友・日本美術家連盟会員

■滞在目的

ミラノ滞在は、下記の 3 つが主な目的でした。
・ブレラ国立美術学院で抽象絵画の表現方法、構想力を学ぶ
・フレスコ画研究及びミラノ・スカラ座鑑賞を通して美術、音楽などのイタリア芸術の研究
・日本文化(茶道と着付け)のワークショップ実施

■滞在の動機

私は、ピエロ・デラ・フランチェスカやフラ・アンジェリコなどイタリア ルネサンス期の宗教絵画に強く惹かれ影響を受けてきました。しかし作品を制作するなかで、自らの表現方法に縛られていると感じるようになり、具象絵画の対極である抽象絵画を学びたいと思うようになりました。

私は 20 歳の頃から茶道と華道を習い、そのなかで「型」というものを学びました。伝統と様式に基づいた美、そしてその先にある「守・破・離」の考えが私の創造の基礎となっています。「守」…型に習い守る、「破」…他流を研究し既存の型を破る、「離」…独自の世界を作り型から離れる。これまでの作品制作が「守」の段階ならば、抽象表現は私にとっての「破」の段階となります。抽象表現作家の充実しているブレラ国立美術学院で、抽象絵画の表現方法、構想力、解釈を学ぶと同時に、イタリア中世・ルネサンス期のフレスコ画やミラノ・スカラ座の舞台鑑賞を通して美術、音楽などのイタリア文化、芸術を研究することにより、これまで積み上げてきた古典表現をより一層深め、ブレラ国立美術学院で学んだ抽象表現と融合し、「離」の境地である独自の世界を開拓したいと考えました。

そして最後に、茶道と着付けのワークショップを通して日本文化を紹介し、私自身のアイデンティティを伝えると同時に、日本文化へのイタリア人の関心、イタリア文化との比較をしたいと思いました。
以上が滞在の動機です。

目次

Ⅰ．ブレラ国立美術学院

１．ブレラ国立美術学院の授業履修
２．ブレラ国立美術学院の授業
３．茶道と着付けのワークショップ
４．絵画クラスの Piccola Festa(小さなパーティー)
５．絵画のクラスメイトと習字
６．講評会
７．ブレラで出会った個性豊かな教授と愉快な仲間たち
８．ERASMUS システム

Ⅱ．フレスコ画研究

９．Brescia
10. Firenze、Arezzo、Assisi、San Gimignano

Ⅲ．課外活動

11. Cremona のヴァイオリン工房
12. 茶道教室と語学交流会
13. ミラノ・スカラ座鑑賞日記
14. イラスト研究会

Ⅳ.イタリア生活

15. イタリアの生活
16. ミラノのアパートと隣人

Ⅴ．結び

17. イタリア文化と日本文化
18. 現地で得たこと、特に印象に残ったこと
19. 渡伊前と後の活動・心境の変化
20. 今後の制作活動の課題・方法
21. 帰国

Ⅰ．ブレラ国立美術学院

１．ブレラ国立美術学院の授業履修

■授業履修から学期修了までの簡単な流れ

1. 興味のある授業に出席し国際センターで渡される履修証明書に教授のサインをもらう
↓
2. 履修する授業が決定したら国際センターに履修証明書を提出する
↓
3. 授業に出席
↓
4. 学期末に国際センターから渡される授業修了証明書に教授のサインとコメントをもらう
↓
5. 国際センターに提出
↓
6. 国際センターから修了証明書を受け取り修了

■履修授業と時間割

・Pittura(絵画)
・Anatomia(美術解剖学)
・Cromatologia(色彩学)
・Scrittura Creativa(線の表現を学ぶ)

	月	火	水	木	金	土
午前	・Scrittura ・Pittura	Pittura	Cromatologia	・Anatomia ・Cromatologia	Anatomia	Anatomia
午後		Cromatologia	Pittura	Italian class		

ブレラ国立美術学院にはERASMUSの制度で留学をした。ERASMUSについては後程書きたいと思う。
ブレラ国立美術学院の学期始めの 2 週間は、履修授業を決定する見学期間となっていた。私はブレラでPitturaの教授をされている清水哲郎先生と相談をしながら、絵画、解剖学、色彩学、Sucrittura Creativaの４つの授業を履修した。履修授業決定後は、履修証明書に教授からサインをもらう。そして国際交流センター―に提出し登録が完了する。

しかし、ここはイタリア。日本のように規則正しくはない。履修希望の授業に行っても、教授やクラスメイトが来ないこともある。清水先生が「ブレラはジャングルでサバイバルだから。」と言っていたが、教室変更、時間変更、休講など、掲示板に掲示されるわけではない。履修授業登録後は、Classroomというアプリで各授業の情報が得られるが、履修登録前は自ら積極的に情報収集に動くことが必要だ。清水先生が言うように、まさにサバイバルだった。清水先生は「教授がいなかったら、近くのカフェを覗いてみるといいよ。」とも教えてくれた。履修期間の間ブレラの回廊で、ERASMUSの留学生仲間が教室と教授を探し歩く光景をよく見かけた。私達は廊下で行き交うと、次の授業は何かを聞き、「Good Luck!」とお互いに言い合っていた。

２．ブレラ国立美術学院の授業

Pittura(絵画クラス)

教授：ESPOSITO ARCANGELO
日時：月.火(9：00～13：00)、水(14：00～18：00)
教室：No.3

■授業内容

・作品制作(テーマ自由)
・毎週月曜、作家研究の発表及び制作作品の中間発表
　＊研究作家は、教授がピックアップした作家 32 名について学生が研究したことを発表する
・クラスでギャラリー見学(Miriam Cahn の展示など)

■履修目的
・抽象と具象の間の表現方法を学ぶ
・抽象表現の解釈の理解

■目標
・これまでの作品を一度リセットし新たな表現方法を研究する

■計画
・ドローイング
・最終的に大小の作品を制作する
・色彩は使わない(白と黒の表現)、形を線で考える(線の研究)

■制作作品
　テーマを決めず、心を無にして自分の感情をドローイングし続けた。絵を破いてみよう、繋げてみよう、貼り合わせてみよう、と次々に沸いてくる感情に任せ制作を進めた。ドローイングを続ける中で徐々に自分がどういうものを作りたいのか、作ろうとしているのか絞り込まれてきた。制作で最も大切にしたことは、“ミラノで描く意味”。これまでの作品と同じことをしているのなら、ミラノに来ている意味がない。“ミラノだからできた作品”を作りたかった。そのためにも、テーマを考えることに時間を使わず、とにかく手を動かした。そして今感じていることを、表現にすることに集中をした。

■感想

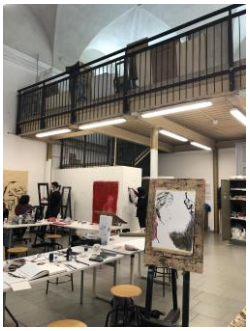
色彩を排除し白黒の表現に限定をした結果、色彩を多用した以前の作品よりも、画面から色を感じるようになった。また鑑賞時の感情によって、作品が青っぽく見えたり、ピンクっぽく見えたり、画面から感じられる色が変化することにも気付いた。そして、表現方法を面ではなく線にすることで、感情が直接的になり、作品と心が一致していくようにも感じた。この現象は興味深く、今後の作品制作の色彩表現において非常に大きなヒントとなった。

今後の課題として「白黒の画面から感じる色彩と感情との相互関係と、作品にもたらす相乗効果」を研究テーマの一つにしたい。

画材：キャンバス布、ジェッソ
墨、糸、ビーズ、毛糸

■Arcangelo 教授のクラス

Espogito Arcangelo 教授のクラスは大変アットホームだった。教授は椅子に座り教室を見渡したり、学生の制作場所を周って話しかけたりアドバイスをする。イタリアでは、受け身な姿勢では何も得られない。積極的に教授に意見を聞く姿勢が大切だった。



クラスでは定期的に作品の中間発表があり、教授と学生の間でディスカッションが行われる。学生は積極的に質問し意見を述べ、自分の考えをしっかりと持ち主張する。曖昧なことは言わず堂々と意見を述べる。教授も学生という扱いではなく、一人のアーティストとして接する。学生の表情が日本の学生よりも大人びている様に感じた。

制作で驚いたことは、私が見た限りでは木枠のキャンバスを使用している学生がほとんどいなかったことだ。大きいロールキャンバス(クラスで共有)を必要な大きさに切り壁にテープで貼る。しかも 130 号(162 cm ×198 cm)くらいのサイズに迷いなくクロッキーのようにどんどん描きだす。彼らを見ていると油絵が大変気楽な画材のように感じた。私はすぐ考えてしまうため、彼らのエネルギーに非常に触発された。このクラスは手や足で描く学生も多かった。

■ある日の出来事

ある日の中間講評で教授に厳しい意見を言われ、泣いたクラスメイトがいた。しかし、その数週間後の授業で、教授が彼女の作品を非常に高く評価し、彼女は泣いて喜んだ。そしてその様子を見ていたクラスメイトも「Congratulazioni！（おめでとう！）」と手を叩きながら喜んだ。すると彼女は教室を出て行き、戻ってきた時にはワインとスパークリングワインを両手に持ち「みんな一緒にお祝いをして！」とワインを配りだした。作品が評価されたことを謙遜するわけでもなく、心から喜びを表現する。またクラス全体で喜びを分かち合う様子は、非常に自然体だった。それにしてもワインを買ってくるところはイタリア人らしい。私もワインをご馳走になり彼女に「良かったね！」というと、彼女は「Grazie,Midori！」と笑顔で言った。

■「Progetto」という言葉

この言葉は、ブレラの学生が作品を制作する時によく使用していたように思う。「Progetto」は英語での「Project」を指す。私が新しい作品に取り組もうとした時、「Midori は今度どんな Progetto をするの？」と聞かれた。絵画作品を制作する上で"テーマ"は勿論あるが、"作品を描く、表現する"という印象だったため、「progetto」と言われると非常に大掛かりなことのように感じた。しかし、自分が何をしようとしているのかをまず明確にし、実験(習作)過程で様々な表現方法を試み、作品を仕上げる。作品が完成するまでのプロセスが大切であり、完成までの一連の流れが「Progetto」なのだと解釈した。この言葉が私には非常に新鮮だった。作品制作の考え方、取り組み方を改めて考えさせられ、身の引き締まる思いがした。

Anatomia Artistica（美術解剖学～基礎クラス～）

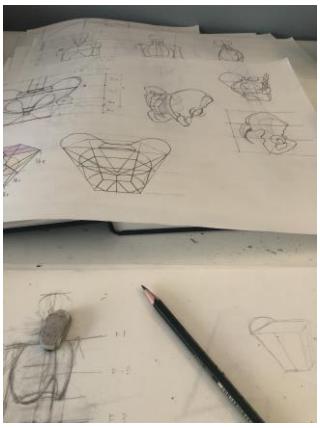
教授：MARIA FALCO
日時：木、金、土(8：30～12：30)
教室：No,4

■授業の内容
・人体構造の理解
・男性ヌードデッサン
・課題提出

■履修目的
・人体の構造を基礎から学び直し理解を深める

■目標
・人体の構造を理解し自然なデフォルメができるようになる

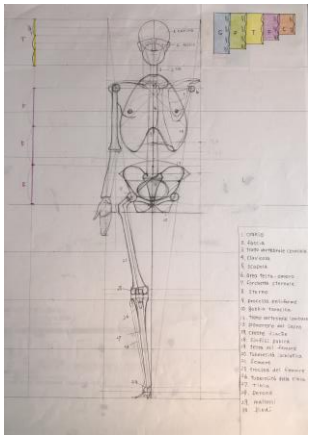
■感想



レオナルド・ダ・ヴィンチ以来のイタリアの伝統である美術解剖学を、本場で学べたことは非常に貴重な経験だった。私が受講したMaria Falco教授の授業は、基礎的な理論と、モデルをデッサンし実践的に解剖学を学ぶカリキュラムだった。教授は人体の比率や構造を説明しながら、黒板にスラスラと人体を描き進める。その過程は大変鮮やかだった。私は人体の比率の美しさに感動し、美術解剖学に魅了されてしまった。これまでも比率を測りながらデッサンは描いていたが、人体の構造の知識が足りていなかった為、漠然とした理解で描いていた。しかし教授の授業で人体の美しさと神秘に改めて気付き、美術解剖学の面白さに夢中になった。

人体構造の理解は十分ではないが、人体に対する意識が変化したことは作品に変化をもたらした。人体に限らず物事も以前よりも構造的に捉えるようになった。

これからも引き続き勉強を続けたいと思う。ブレラで美術解剖学を学べたことは、ミラノ滞在の大きな収穫の一つだった。この授業は課題も多く大変だったが、とにかく学ぶことが楽しかった。私がクラスメイトに解剖学は本当に楽しいと話すと、友人が私のことを「Midori da Vinci‼」と呼んだのも楽しい思い出だ。



■ヌードデッサン

教室授業では男性ヌードデッサンを描いた。ヌードデッサンといっても普通にデッサンするのではない。人体の内部を描くのだ。頭蓋骨、肋骨、骨盤など骨格の位置を正しく把握するだけではなく、骨の形も正確に理解し描くことが求められる。特に骨盤が難しく、最初はヌードデッサンをどう描いて良いのかわからなくなるほどだった。しかし、描くことに徐々に慣れていくと体の内部が透視できるような錯覚を起こした。これまで人体デッサンは苦手意識が強かったが、理論を学び理解を深めることで、苦手意識が少し改善されたように思う。

Cromatologia(色彩学)

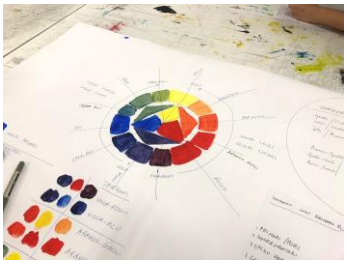
教授：MARIA CRISTIANA FIORETTI
日時：火、水(14：30～17：00)、木(10：00～12：30)
教室：No,5

■授業内容
・色相環の作成
・色彩の対比による作品制作(課題提出)
・impronte sonore(音楽の表現)

■履修目的
・色彩の効果の基礎を学び直す

■目標
・色の関係性を理解し色彩表現を豊かにする

■感想



ファッションの国 イタリアの色彩学に興味があった。授業では色彩の基礎を学び直すと同時に、音楽を色、線と点で表現することを学んだ。
とりわけ impronte sonore の演習は非常に楽しかった。心を無にして音楽を感じ、色と線を探す。「音楽、心、色、表現」の一致を模索するうちに、無意識にこれまで使うことがなかった色彩や色の組み合わせができ、新たな発見があった。
また、生活の中で触れるイタリア人の色彩感覚は新鮮なものばかりで、特にミラノのショーウインドーに飾られているファッションの色彩とその組み合わせの美しさには常に魅了された。

Ⅰ.Progetto Musicale(impronte sonore) (計5回)

用意するもの：日用品(スプーン、パスタ、ナイフ、櫛、綿棒、歯ブラシなど)、画用紙、絵の具、
使用したもの：スプーン、ストロー、楊枝、櫛、フォーク、綿棒、歯ブラシ、水彩絵の具、画用紙

■プロジェクトの内容
・身の回りにある日用品を使って音楽を色と線で表現する

■授業の流れ
1. メトロノームのテンポに合わせて、絵の具を付けた日用品で画用紙に点を打つ。＊テンポは徐々に速くなる
2. 音楽を聞きながら日用品や手を使い音楽を色、線、点で表現する(計4曲)

■制作作品

Scrittura Creativa

教授：PIERMARIO DRIGATTI
日時：毎週月曜(9：00～13：00)
教室：No.24

■授業内容
一週目：大きな紙に白と黒の絵の具で筆を使い自由に線を描く(グループ制作)
二週目以降：文字や詩からイメージしながら線の表現方法の探求
・銅版画制作
・本の制作

■履修目的
・線の表現方法を研究する

■目標
・自分の線表現を見つける

■感想
最初の授業の時、Drigatti 教授に作品のポートフォリオを見せた。教授は私に「色が多すぎる。イタリアで学ぶべきことはイタリア絵画の線と白黒の表現だ。この授業はそれが学べる」と言った。授業で“線”を探求していくなかで、"表現対象がないと線は意味を持たず表現にならないのでは"と考えながらも、机上に付けられた多数のカッターの傷跡を見た時、偶然に組み合わさった線に美しさを感じると、線に意味はいらないのでは、と考えたりもした。教授の授業を通して"線と形"の抽象表現について考えるようになり、また"意識と無意識"の表現にも興味を抱いた。今後も線と形、意識と無意識の表現について研究を続けたいと思う。

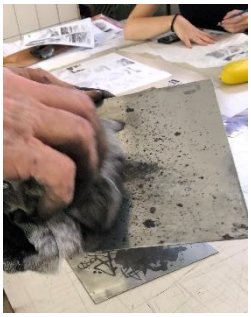
■グループ制作風景
5人ぐらいのグループに分かれ大きな紙に、白と黒の絵の具を使い自由に線を描いた。描きはじめは控えめに線を描いていたクラスメイトも、徐々にテンションが上がり手で描いたり、紙の上を歩き靴の跡を付けたり、箒の柄で描いたりと何かを表現しようと模索し始めた。この授業に限らず手や足を使って作品を描く学生が多かったように思う。感情が高まると体全体で表現したくなるようだ。確かに筆で描くより手や足で描く方が、感情をより直接的に表現できるように感じ、作品と心が一体化したような気持ちになる。完成し改めて画面を見ると、偶然できた線と塊、白と黒のバランスが面白かった。この課題は、白と黒、塊と線のバランスの美しさを考える勉強になると同時に、無意識の表現についても考えさせられた。

■個人制作

墨と習字の筆を使い線の模索をした。初めはテーマを決めず様々な線や円を描いた。ただ線を描くといっても描いてみるとなかなか難しい。心と線が一致しない。何を線で表現したいのか。ある時、作品と作品を張り合わせていると教授が「ドローイングを張り合わせたりすることで、オリジナルの作品ができるからこの作業を続けなさい。」とアドバイスをくれた。心を無にして手を動かすことが楽しかった。心は無のつもりでも実際は無ではなく、無意識のうちに何かを表現しようとしていたようにも思う。

■銅版画制作

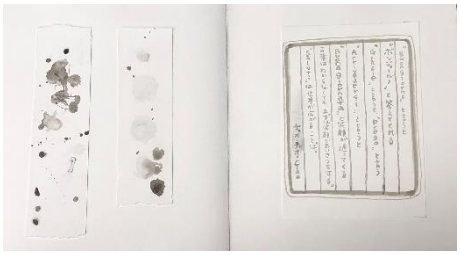
銅版画は学生時代に選択授業で制作して以来だった。そのため作業工程を完全に忘れていた。教授とクラスメイトに助けられながら、無事版画を擦ることができた。久しぶりの版画制作は非常に新鮮だった。版画に挑戦したことで、自分の表現方法と考えに制限をかけていたことに気付いた。



■完成作品

この授業の課題では冊子形式の作品を制作した。冊子の中身は文(詩)と版画で構成されている。
私はテーマに大変迷ったが「Salute(挨拶)と出会い」にした。「Buongiorno」や「Ciao」と挨拶をしながら教室に入ると必ず挨拶を返してくれる教授やクラスメイト。この繰り返しで友達ができクラスに溶け込むことができた。この出来事を文と版画で表現した。

tittole:「Una Volta nella vita」(一期一会)



3. 茶道と着付けのワークショップ

実施日：2022 年 6 月 8 日(水)
　場所：絵画クラスの教室(No.3)
参加者：Arcangelo 教授、絵画クラスのクラスメイト

■内容
・茶道の簡単な説明(一期一会について説明)
・浴衣と着物の違い、実物を見せながら説明
・クラスメイトに浴衣を着付け
・茶道具の簡単説明
・懐紙について説明したのち、懐紙にお菓子を載せて配る
・袱紗捌きを見せ、抹茶を点てる。クラスメイトにも代表で一人抹茶を点ててもらう
・Arcangelo 教授にお客の作法を説明し抹茶を飲んでもらう
・クラスメイトにも抹茶を点て味見をしてもらう
　＊コロナ禍の為、感染予防のために紙コップを使用

＊準備したもの

・浴衣一式(帯、下駄)…2 セット	・懐紙
・着物一式　＊説明用	・風呂敷(浮世絵と桜が描かれているもの)
(訪問着、絽の着物、帯、足袋、草履など)	・電気ポット
・茶道セット	・ミネラルウォーター
(抹茶、茶碗、茶筅、茶杓、棗、建水、袱紗)	・紙コップ
・茶菓子(イタリアの焼き菓子)	

■目的
・日本文化を紹介し欧米人の日本文化に対する感想を聞く
・交流を深める

■感想
　私は茶道と華道を習っていたこともあり、ミラノでは受け身の姿勢だけではなく、こちらからも日本文化を発信したいと思い、茶道と着付けのワークショップをミラノ滞在目的の一つにしていた。当初、秋-冬に滞在する予定がコロナで出発が延期となり春-夏に変更になった。その為、ワークショップも着物ではなく浴衣で行うことにした。教授とクラスメイトの好意で授業中に時間を頂き開催することが出来き、想像以上にみんなが喜んでくれたことや、興味を持ってくれたことが本当に嬉しかった。残念だったことは、授業中の限られた時間の中で実施したため、私が着物を着られなかったこと、和菓子が用意できなかったことだ。
　しかし、今回ワークショップを行ったことで、話す機会のなかったクラスメイトとも話すようになった。終了後、オリジナルシールをお礼にプレゼントしてくれたクラスメイトもいた。彼らが日本に興味を持ち喜んでいる姿を見て、様々な文化があるからこそ自分の文化をしっかり学び、そして伝えることの大切さを実感した。貴重な授業時間を使わせてくれた教授とクラスメイトに心から感謝したい。

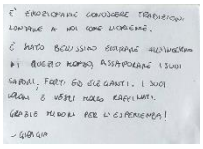
■教授とクラスメイトの反応

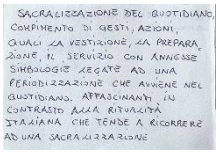
教授はワークショップを終えたとき「Brava, Midori!」と喜んでくれた。教授は抹茶を飲んだ瞬間少し飛び上がり、目をまん丸くして周りにいる学生を見回し、その様子を見て学生が大笑いをした。恐らく抹茶が苦くて驚いたのだと思う。

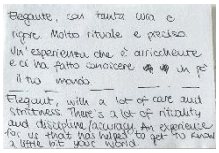
クラスメイトは浴衣や着物に非常に興味を持ち、帯がリボン状に結ばれていく様子に、マジシャンのようだと驚いた。オペラ「蝶々夫人」の影響なのか、着物を「芸者着物」という人や、「着物には特別の白い靴下が必要でしょう？」と足袋に興味津々のクラスメイトもいた。そして茶道の細やかさと作法の多さに非常に驚いていた。「日本の文化を知ることは素晴らしい経験になった」や「Midori の世界を少し知ることができた」、「日本に旅行に行ったような気分になった」など感想をくれた。なかには「日本人のアイディアはとても繊細でクレバーだと思う。いつか日本に行って日本人のアイディアにたくさん触れたい」と言ったクラスメイトもいた。終了後、クラスメイトに感想を書いてもらった。

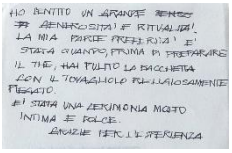
一人のクラスメイトが「You are clear like the sky.」と英語でコメントしてくれたことがうれしかった。

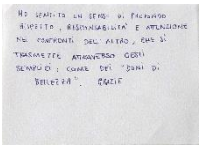
＊コメントの一部











■余談

浴衣を着たクラスメイトとナポレオン像の前で写真を撮る為に廊下に出た。すると、他の授業で一緒のクラスメイトが、遠くから大きく手を振って私を呼び、「あれは Midori が持ってきたのか」と聞いてきた。その時の彼女の目力はとても強かった。そして浴衣を見て「Bellissimo‼」と感嘆し、「来週の授業の後、私にも着付けしてほしい」と言い、その為に髪型もセットしてくるからと頼まれた。

★ナポレオン像の前で日本画の
「見返り美人」のポーズをとるクラスメイト

4. 絵画クラスのPiccola Festa（小さなパーティー）

絵画クラスでは時々、授業後に小さなパーティーが開かれた。それぞれワインやお菓子、おつまみを持参する。私は黒糖かりんとう、アップルパイ味のかりんとう、七味味噌かりんとうの 3 種類を持参した。それぞれ持ち寄ったものが置かれているテーブルにかりんとうの箱を置くと、クラスメイト達は箱を見て「Che Bello‼(美しい)」と大変喜んでくれた。そして「日本から持参したのか、それともミラノで買ったのか」と質問をしてきた。"日本から持ってきたのか、それともミラノで購入したのか"という質問は、日本のものを持参する度によく質問された。遠い日本から飛行機で運ばれてきたと思うとエキゾチックに感じるようだった。

印象的だったことは、彼らがかりんとうを食べる時に先ずお菓子に対して賛辞を述べ、その後口に入れる。私が「Come？(どう？)」と聞くと「ちょっと待って！まだテースティングしているから」と、ワインの試飲のように口先で少しずつ噛みながら味をしっかり確かめる。口の横で親指と人差し指を擦り合わせながら目をつぶり、時折視線を天に移しながら「最初は甘さがあるけど...そのあと何かの風味が広がってきた。ん？待てよ？何だろう今まで食べたことのないスパイスを感じる」とジェスチヤー付きで真剣に感想を述べてくれた。「味はどう？」と私が質問したクラスメイトの大半が、同じような真剣なジェスチャーと共に「Molto Buono!」と答えてくれた。演劇がかっている少し大袈裟な感じが陽気で、イタリア人らしく楽しかった。

5. 絵画のクラスメイトと習字

ある日、私が墨と筆でドローイングをしていると数人のクラスメイトが「それは日本の筆？」と聞いてきた。彼らは筆と墨にとても興味を持ち、彼らに筆を渡すと、「ｄfficile!(難しい！)」と言いながらスケッチブックに線を引いたり円を描いたりした。私が筆は垂直に立てて使うことを教えると、ヨーロッパは横書きの文化で肘もついて書く為、筆を立てて肘を上げて書くのは本当に難しいと言っていた。

Vittoria という名前のクラスメイトが、自分の名前を漢字で書いてほしいと言ってきた。自分の名前は英語で「Victory」だけど、日本語で何という意味かと聞いてきた。「勝利」と書くと、彼女は漢字を見て「すごく強そう」と力こぶを出す真似をした。それを見ていたクラスメイトが次々と集まってきた。なかには日本語で表すには難しい名前もあり、イマジネーションを使い意味を踏まえて名前を考えた。その日は一日、名前職人のようだった。漢字で彼らの名前を書いて渡すと、彼らはその紙を胸に抱きしめながら心を込めて「Midori, Grazie mille」と言って非常に喜んでくれた。このことがきっかけでクラスメイトと打ち解けた気がする。

漢字と言えば、中国と日本の漢字の違いを時々聞かれた。この漢字は中国？それとも日本？と聞いてくる。大半が中国漢字のことが多かった。他にも日本語のひらがな、カタカナの使い分けも聞かれることがあり説明に苦労した。彼らは思いがけない視点から質問をしてくるため、その時はいつも家に帰って調べ後日答えた。彼らの面白い質問のお陰で新しい知識、新しい視点を増やすことが出来きた。

６．講評会(絵画クラス)

■印象的なクラスメイトのプレゼンテーション

印象的だったクラスメイトのプレゼンテーションがあった。彼女は何枚もの大きな作品を壁に張り、その作品の前に胡坐を組み、何度も深い深呼吸をして詩を読みだした。導入は静かに入った。時々アクセントを付けながら徐々に声が大きくなり、何かを訴えるかのような叫び声となって涙を流した。テンションがマックスに達すると、また段々と何かに語り掛けるように静かにゆっくりと詩を読み終えた。読み終えた瞬間、クラスは静まり返りArcangelo教授が手を叩きながら、静かな声で「Brava、Brava!!」と言った。そしてその声でクラス中から拍手が沸き上がった。彼女は教授の言葉を聞くと、詩が書かれた紙で顔を覆いながら床にひっくり返り、そして両手で天を仰いだ。すると後方で彼女の発表を見守っていた親友が彼女に駆け寄り、床に仰向けなっている彼女に抱き付き泣きながら喜んでいた。まるで劇場で舞台を見ているようだった。

■私のプレゼンテーション

作品のプレゼンテーション。私がプレゼンをしたいと教授に伝えると「Bene.」と言い、クラスメイトに向かって「来週の月曜はMidoriが作品発表をしたいと言っているので、私たちは喜んで発表をみよう！」と笑顔で言った。

イタリア語のプレゼンの内容を一生懸命考え練習をした。当日は英語ができるクラスメイトが補佐をしてくれたが、私は出来る限りイタリア語で答えるように努めた。説明中イタリア語の発音がおかしくて伝わっていないと思うと、近くにいるクラスメイトに確認をしながら、どうにかプレゼンを終えた。私の説明は恐らく理解不能なイタリア語だったと思う。教授は「この作品が一番いいと思う」、「授業中、作品をちぎったり貼り合わせたり模索していたのが印象的だった。それを続けるように」や「日本の抽象作家を研究するように」など感想を言った。そして「Midoriは来年も引き続きブレラで勉強を続けるのか？」と聞かれたので「いいえ。私は8月末で日本に帰ります。」と伝えると「一緒に日本についていきたい」と茶目っ気たっぷりに教授が笑い、最後に「Grazie、Midori」と言って肩をポンポンと叩いた。

7. ブレラで出会った個性豊かな教授と愉快な仲間たち

ブレラ国立美術学院での日々は本当に楽しいことばかりだった。学校に行くと廊下でクラスメイトに行き会う。彼らは「Ciao,Midori！」と声を掛けてくれたり、遠くから手を大きく振ってくれたりするため、日本が恋しくなることもなく本当に楽しく幸せな日々だった。

絵画クラスのArcangelo教授は非常にチャーミングな教授だった。私が、ドローイングをしていると「Piano,Piano」、「Va bene,Va bene」とニコッと笑いながら声を掛けてくれる。この言葉は教授の口癖だったように思うが、私はこの言葉を聞くと非常に安心した。気付くと、私もこの言葉が口癖になっていた。それから、とても強い目力で、教室でもオンラインでも必ず「Ciao,Midori！」と声を掛けてくれる、厳格で熱心な解剖学のFalco教授、ダンディなDrigatti教授、おしゃれな色彩学のFioretti教授。履修した授業の教授は皆とても優しかった。教授に「Midori,hai Capito?(理解した？)」と聞かれ、私が「Non ho capito.(理解していません)」と答えると、もう一度わかりやすいイタリア語でゆっくり説明をしてくれた。そして私が「Ho capito.」と答えると「Bene.」と笑顔で言ってくれた。

クラスメイトもみんな陽気で優しかった。Scrittura creativa で一緒の Marina は、携帯電話の翻訳機能を使って教授の話を毎回翻訳してくれ、いつも困ったことはないかと気に掛けてくれた。絵画クラスの Carmen は、いつも隣に座って話をしながら制作をした。日本語の「お腹がペコペコ」と言う言葉を教えると、お腹が空く度に「ポコポコ」や「ペケペケ」と彼女が言い間違えて笑い合ったことや、授業中にブレラの二階にあるカフェでコーヒーを飲みながら、作品の話をしたことは大切な思い出だ。他にも、日本語の「成」という字について、できる限りのことを教えてほしいとメッセージを送ってきた Davide、「遠い未来のことばかり考えていると、今日のきれいな夕日が見えないから今を大切にするの」と素敵な言葉を言った色彩学のクラスメイト YingYing。

＊クラスメイトが描いた私の顔

ここでは書き切れないほど多くの楽しい出来事があり、多くの友人や教授に助けられた。私のミラノ滞在の大半は、ブレラ国立美術学院で完結したように思う。

ブレラで出会った教授やクラスメイトには感謝の気持ちでいっぱいだ。

■Pittura の教授 清水哲郎先生

ブレラ国立美術学院で Pittura の教授をされている清水哲郎先生。私が履修していた授業のクラスメイトの多くが清水先生の授業を履修していた。私が日本人とわかると決まって「Prof Shimizu は知っているか？」と聞かれ、「Prof Shimizu is No1」や「Prof Shimizu は素晴らしい」と言うクラスメイトが大勢いた。ブレラの教授は技法や理論的なことを教えるという感じではなかった。しかし清水先生は技法や絵画理論をしっかり指導してくれること、そしてその優しい人柄で、清水先生に対する学生の信頼度は非常に高かった。清水先生には授業の履修など様々な場面で本当にお世話になり、安心して楽しいブレラ生活を送ることが出来た。そしてアトリエにも遊びに行かせて頂き、奥様の文子さんのおいしいイタリア料理を頂きながら、色々な話をした時間は本当に楽しかった。とりわけ、清水先生のお話してくださるイタリア人の抽象絵画の捉え方は非常に勉強になり、時間があれば絵画の問題点など、もっと詳しくお話を伺いたかった。

8. ERASMUS システム

私は ERASMUS システムという制度で女子美からブレラ国立美術学院に留学をした。ERASMUS の名称はネーデルランド出身の哲学者「デジデリウス･エラスムス」から由来し人的交流、見聞を広めることを目的とした EU 諸国間の留学制度のことを言う。現在は EU 圏外からもこの制度を使って留学できるようだが、大学を卒業している私がこのシステムを使って留学できたことは非常に貴重な経験であった。この制度のお陰でフランス、イギリス、ポルトガル、ブルガリア、アルメニア、ドイツ、ウクライナなど様々な国の仲間と出会えた。ERASMUS のメンバーは授業の合間や放課後にカフェでお茶をしながら、授業や教授のこと、日常生活で困ったことなど情報交換をしながらお互いに助け合っていた。

ERASMUS システムは EU 圏内なら自由に留学ができる為、EU は"One team"という印象がある。日本から ERASMUS システムで留学したことで、普通に留学するよりも ERASMUS という仲間意識が芽生え、国という枠にとらわれず、"世界は一つ"と肌で感じられたように思う。ERASMUS システムについては、日本ではまだあまり認識されていないが、この制度を女子美の学生が一人でも多く活用し様々な国の人々と親交を深め、国という意識の枠を飛び出す経験をしてほしいと心から感じた。

Ⅱ. フレスコ画研究

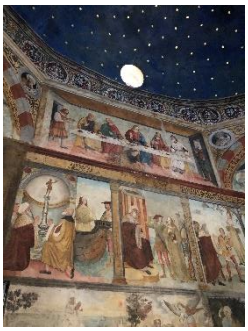
9. Brescia(ブレシア)

■Cattedrale di Santa Maria Assunta
■Duomo Vecchio
■Chiesa di san Francesco d’ Assisi
■Museo di Santa Giulia

Brescia はミラノ中心部から電車で約一時間の小さな町。ミラノとは違い静かでのどかな空気に包まれている。私は素晴らしいフレスコ画が多くあるこの町に魅了され、ミラノ滞在中に 2 回訪れた。Brescia には世界遺産に認定されている美術館"Museo di Santa Giulia”や旧大聖堂、新大聖堂がある。

まず Chiesa di san Francesco d’ Assisi は、観光客が少なく街の人が通う日常に溶け込んだ教会。一歩中に入った瞬間、静かな空気に包まれた。そこには信仰だけが存在する。左側には７つの礼拝堂、右側には７つの祭壇があり、様々な年代のフレスコ画を見ることが出来る。私はこの教会に入った時の感動を今も思い出す。

街の中心には旧大聖堂と新大聖堂が建つ広場がある。新大聖堂は豪華で素晴らしいが、旧大聖堂のシンプルな建築の中に存在する荘厳な空気には遠く及ばないように私は感じた。旧大聖堂は 12 世紀に建てられたロマネスク様式の円形の建物で、新大聖堂に比べると、非常に素朴な教会だ。内部は円形の回廊で下に降りていく。その先には、この教会に感じた素朴なイメージとは違う、素晴らしいフレスコ画が一面に散りばめられていた。



Museo di Santa Giulia は 2011 年に世界遺産に認定されている博物館。フレスコ画やモザイク、遺跡など膨大な収蔵品があり一日中居ても飽きない、非常に魅力的な博物館だった。素晴らしい作品群の中でも、やはり No,1 は美術館内部のあるサンタ・マリア・イン・ソラーリオ教会の壁画だ。天井にはラピスラズリの星空が広がり中央にキリストがいる。そして壁は聖書の場面が描かれている。フロリアーノ・フェッラーモにより制作された。この作品の中に入ると、時が経つのを忘れてしまう。他にもサン・サルヴァトーレ教会の壁画など歴史を学ぶ上でも貴重な作品が多く収蔵されていた。

10. フィレンツェ、アレッツォ、アッシジ、サンジミニャーノ

7 月に入って、フィレンツェを中心にフレスコ画を見る旅行に行った。今回の旅行の主な目的はピエロ・デラ・フランチェスカの壁画をアレッツォで見ることだったが、訪れた町で様々な発見があった。

■ Firenze

■Galleria degli Uffizi
■Museo nazionale di San Marco

フィレンツェではウフィツィ美術館とサン・マルコ美術館を中心に見学をした。ウフィツィ美術館の収蔵品の質と量は圧巻だった。ルネサンス期の作品の宝庫で、

素晴らしい作品の数々に感動、感動の連続だった。ダ・ヴィンチの「受胎告知」、「東方三博士の礼拝」、ボッチェリの「プリマヴェーラ」に始まる名作の数々、レンブラント、ミケランジェロ、ラファエロ、フィリッポリッピなど、この作品はこの美術館にあったのか、と心臓が持たないくらいドキドキし通しだった。しかし、名作を見続けているうちに人間は贅沢なもので、一度にこれだけの名作を鑑賞できることは嬉しいけれど、小さな町の作品に会いに行く方が苦労した分、より一層感動できるような気が段々としてきてしまった。しかしながらウフィツィ美術館は本当に素晴らしかった。

フラ・アンジェリコの作品の大半が収蔵されているサン・マルコ美術館。フラ・アンジェリコの有名な「受胎告知」の持つ静けさと厳かな空気に、心が清められる思いがした。私は以前からアンジェリコの色彩を参考にしていた。絵が放つ美しい光はどこから来るのだろうか。人物の持つ優しい表情。過去の作品なのに現代的な部分もある。ヴァザーリの芸術家列伝のなかで、フラ・アンジェリコが「キリストの絵を描くなら、いつもキリストとともに過ごさなければならない」と言っていたというような文があった気がする。この言葉がフラ・アンジェリコの作品を目の前にして改めて胸に刺さった。

■　Arezzo

■Basilica di san Francesco
■Duomo

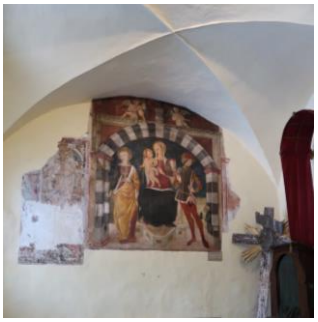
イタリアに来て必ず訪れたかった場所。私が最も好きな画家、ピエロ・デラ・フランチェスカの「聖十字架伝説」と「マグダラのマリア」がある。
画集でずっと見てきた作品を目の前に、"本当に存在した"という不思議な気持ちと、言葉では言い表せない感動に作品の前に立ち尽くした。見学時間は 30 分。瞬きをするのも忘れるくらい作品を目に焼き付けた。フランチェスカの魅力は落ち着いた色彩と遠近法を使った空間構成だが、何よりも作品に品位がある。奥行きがあるのに、どこか平面的な不思議な印象を与える。この街に一週間滞在して毎日「聖十字架伝説」を鑑賞していたい。アレッツォは「芸術家列伝」のヴァザーリの出身地でもあり、映画「Life is beautiful」の撮影が行なわれた町でもある。観光地ではない静かなこの街は、フランチェスカの空気に包まれていた。帰国してからも、この街の空気感を思い出す。それだけでドキドキする。

■　Assisi

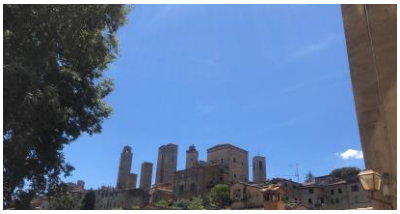
■Basilica di san Francesco
■Basilica di santa Chiara

丘陵地に築かれたアッシジの街は遠くから眺めると天空に広がる要塞という感じだが、街の中は花に包まれた家が多い可愛らしい街だった。

サン・フランチェスコ聖堂にはチマブーエ、ジョット、マルティーニなどのフレスコ画ある。28 の場面を描いたジョットの「聖フランチェスコの生涯」は、圧巻の作品群だった。ジョットはルネサンスの生みの親と言われ、中世からルネサンスへと移行していく過程を見る上で非常に勉強になった。アッシジには小さな教会もたくさんあった。街を散策しながら教会を見つけると中に入った。街の片隅にある教会で思いがけず素敵なフレスコ画に出会う。その度に小さな幸せを感じる。



■ San Gimignano



■Duomo Collegiata
■Palazzo del Popolo

サンジミニャーノは城壁に囲まれた街で、「中世のマンハッタン」と呼ばれている。そして現在も 13 世紀から 14 世紀の塔が 14 本残っている。この中世の街並みを残した小さな町には、シエナ派の「旧約聖書」、「新約聖書」の素晴らしいフレスコ画がある。壁から天井に至るまでフレスコ画で埋め尽くされ、教会がフレスコ画で造られているような印象さえ与える。とりわけ、ポポロ宮(市立美術館)に収蔵されているフレスコ画がおもしろかった。特に Pier Francesco Fiorentino の作品にとても興味が沸いた。宗教色があまり強くなく、どこかコミカルで人物の表情や色彩が可愛らしい。絵本から飛び出したような作品だ。私の作品と共通する部分がある。その他にもサンジミニャーノには、私の世界観に似た作品が多数あった。今まで知らなかった画家に出会えることがイタリア滞在の喜びの一つだ。

Pier Francesco Fiorentino
(Firenze, 1444/5-1497)

Ⅲ. 課外活動

11. Cremona のヴァイオリン工房

クレモナの街はストラディヴァリをはじめ多くのヴァイオリン工房がある。日本ではジブリ映画「耳をすませば」の舞台で有名らしい。ミラノのように近代的な建物はなく、赤みの強いオレンジの色の屋根が並んでいる。

日本人のヴァイオリン職人の工房を見学させて頂いた。私は楽器のなかでヴァイオリンが最も好きなため、製作工程は興奮のし通しだった。

ヴァイオリンの縁にある細い黒い線は、描いているのではなく薄い板をはめ込んでいることや、ヴァイオリンの背面の横に流れる木目は、ライトを下から上に照らすと動いているように見えると教えて頂いた。ヴァイオリン博物館で実際にライトを照らしてみると、本当に動いて見えた。これはニスの塗り方に関係し、塗り方が悪いと動かないらしい。

美術館のスタッフに「とても素敵な美術館だった」と伝えると、昨年販売されていたクレモナの書籍をプレゼントしてくれた。心がほっこりした。

12. 茶道教室と語学交流会

■茶道教室「ミラノ表千家教室天蓋庵」

滞在の間、女子美同窓会ミラノ支部の古山さんが習われている杉山やすこ先生の「ミラノ表千家教室天蓋庵」に通わせて頂いた。先生のご自宅地下にある本格的な茶室は、一瞬ミラノにいることを忘れてしまう静寂な空間だった。一歩、茶室に入ると背筋が伸び凛とした気持ちになった。

■茶道のワークショップ

茶道教室ではワークショップも開催した。参加者は語学交流会の仲間達とその友達。5 人ぐらいのグループに分かれ 3 回行い計 15 名くらい参加した。初めて茶道を体験する人が多く、茶室への入り方、御菓子の頂き方、抹茶の飲み方、全てに作法がある事に驚いていた。彼らが日本文化に興味を持ってくれていることが本当に嬉しく、日本文化を知ろうとする彼らの真摯な姿勢に感謝の気持ちが沸くと同時に、私も精進しなければと強く感じた。

■語学交流会

＊バルバラさんのお茶カフェ「La Teiera Eclettica」のアペリティーボ

古山さんの企画でイタリア人と日本人の語学交流会が毎週木曜日に開かれた。場所は茶道教室で一緒にお稽古をしているバルバラさんのお茶カフェ。毎週 15 人くらいが参加し、イタリア人と日本人が半々くらいだった。時にはイタリア人のほうが多いこともあり、日本語を勉強するイタリア人が多いことに驚いた。勉強をしたい理由は日本文化に興味があるということは勿論、「日本語の響きが綺麗だから」という理由も多かった。語学交流会ではイタリア人は日本語を話し、日本人はイタリア語を話した。本当に楽しい時間だった。

13. ミラノ・スカラ座鑑賞日記(La Scala)

■Opera

- Ariadne auf Naxos—Richard Georg Strauss
- Rigoletto—Verdi

■Balletto

- Sylvia

■Recital

- Anna Netrebko

■コロナ禍の公演

本番前日に通し稽古を鑑賞した。舞台が始まる前に責任者の挨拶があった。挨拶の中で出演者の一人がコロナに感染し急遽代役を立てなければならなかったこと、コロナ感染者が多く代役を見つけることが大変だったこと、しかし、ついにウィーンで見つかり出演者は 45 分前にウィーンから劇場に到着をしたことが話された。そして代役の PCR 検査結果は陰性だったと言い、これで無事に舞台本番が迎えられると観客に伝えた。会場は歓声と拍手に包まれた。この日から観客人数を通常に戻したこともあり、この日をずっと待っていたのだろう。コロナ発生直後、非常に辛い経験をしたイタリアが、日常を徐々に取り戻しつつあることへの喜びが会場全体から伝わり、胸に染みた。

■イタリア人の観客

Anna Netrebko の一夜だけのリサイタルということもあり満席の会場は熱気に満ちていた。2 曲目が終わった時、最上階に近いボックス席から何かがドスン、とすごい音を立てて落ちた。一瞬会場が静まり返った後、驚きの声と拍手が沸いた。落とされたものは花束だったのだ。Netrebko はその花束を抱きかかえ、投げられた方向に手を挙げて感謝を表現した。そして花束を抱きかかえながら一曲歌い、その後はその花束を舞台前方の中央に置いた。演出だったのだろかと思うほどドラマティックな出来事だった。

ミラノ・スカラ座は世界三大オペラハウスということもあり、オペラの公演日は、とりわけ着飾っている観客が多い気がした。そしてオペラや音楽が日常生活に自然に溶け込んでいるのを実感する。街中でカンツォーネを歌っている人、アパートの一室から聞こえる歌声やヴァイオリンの演奏。

リゴレットの公演では、最も有名な曲「La donna e mobile」の場面で、隣席の年配の女性が前のめりになり、一緒に歌を口ずさみ出したり、シルヴィアの公演でも隣に座っていた大柄の男性が、体を前に乗り出して音楽に合わせ指揮をするように手を動かしたりと、心から舞台を楽しんでいる。恐らくそれらの行動は無意識に行っているのだと思う。日本の公演会場ではあり得ない行動だが、舞台を楽しむ様子が微笑ましかった。

余談だが、オペラの公演で、前の座席に装着されている舞台セリフの字幕ガイドを私が使わないでいると、隣席の年配女性がサッとスイッチを入れて、英語字幕が見られるようにしてくれた。イタリア人のこのような優しさは、滞在中何度も触れる機会があった。

14. イラスト研究会

ブレラに通う唯一の日本人留学生を清水先生に紹介して頂いた。彼女とは 5 月から週に一回、イラスト研究会を行った。毎日最低一枚スケッチを描き週末に講評会をした。画材、紙や表現方法の試行錯誤を重ねながら改善点や意見を述べ合い切磋琢磨を続けた。彼女との出会いは私にとってとても大きかった。そして、この時描き溜めたスケッチは、絵日記となりミラノ生活の貴重な資料であり大切なアルバムとなった。

Ⅳ. イタリアの生活

15.日常生活

ミラノでの生活は毎日が楽しいことばかりだった。ミラノ到着直後は、買いたい物がある度にアパートの受付にいるマルゲリータに片言のイタリア語と身振り手振りで説明をし、お店の場所を聞いた。携帯ショップで SIM カードを換えた時も言葉が通じず、作業終了後にショップのおじさんに笑いながら「ふぅ～。」と額の汗を拭うジャスチャーをされたり、生地屋では何度も同じレースの見本本が出てきてエンドレスに見続けたりと、日常生活で起こった様々な事柄は本当に楽しい思い出ばかりだ。

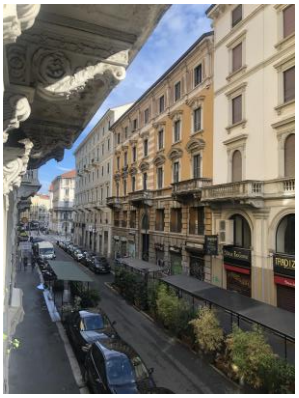
生活に慣れていくうちに顔見知りのお店も徐々にできた。特に登下校時によく通ったブレラ美術学院近くのパン屋さんは、私がお店の前を通ると、店内から笑顔で「Ciao、tutto bene？」と声を掛けてくれるようになり、朝夕手を振って挨拶をするのが学校に通う楽しみの一つとなった。

■通学路

私は毎日学校まで歩いて通っていた。徒歩で約 25 分。アパートを出てトラムの線路を横切り、緑生い茂るマロニエの並木道を通ってモンタネッリ植物公園に入る。広大な公園の緑の樹木の中を散歩し、右手にイエローの宮殿、左手に犬が駆け回る芝生を眺めながら Archi di Nuova の交差点を渡る。遠くに見える教会の時計塔が見えてくるとブレラまであと少し。私はブレラ国立美術学院までの通学路が大好きだった。

16. ミラノのアパート

ミラノで滞在したアパートは、Porta Venezia という渋谷のような繁華街にあった。アパートの周りにはいくつもの Bar があり、毎日がクレイジーナイトだった。



初日こそあまりの大騒ぎに大丈夫かなと心配したが、2 日目には全く気にせず眠れるようになり、1 カ月も過ぎると騒音自体全く耳に入らなくなった。そして、毎日のように誰かの誕生日パーティーが真向いの Bar で開かれていた。午前 0 時になると、「Tanti auguri a te(Happy birthday to you)」が歌われ、終わりと同時にテーブルをバンバン叩きグラスが割れる音と笑い声が聞こえる。3 日連続で少し音の外れたビートルズメドレーを誰かが歌っていたこともあった。夜中の 2 時まで騒ぎは続き、朝 6 時にはゴミ収集車がものすごい音を立てて缶瓶の回収をする。本当に賑やかだったけれど、イタリア人の活気溢れる日常生活を感じながらの生活は本当に楽しかった。

■隣人フェルナンダ

私の隣の部屋にはボリビアからデザインの勉強に来ている Fernanda が住んでいた。ある朝、ドアの前で行き会い簡単な挨拶だけした。するとその夜、私のドアの下に Fernanda から「困ったことがあったら何でも言ってね。」というメッセージと電話番号が書かれた手紙が挟まれていた。メッセージがドアに挟まれていることに映画みたいと驚き、そして彼女の気遣いに感謝した。それ以降連絡を取り合い一緒にカフェやアペリティーボに行き、イタリア語と英語を交えてお互いの作品や国のことを話したり、私の部屋で習字を書いたり抹茶を点てたりした。習字では、私が書いた見本を見ながら「Questo、Questo」と言いながら、一本一本ゆっくり線を書いて字を完成させた。墨の濃淡やにじみが出ることに感嘆し、ボリビアには和紙のような紙がないと和紙の繊細さに驚いていた。

Ⅴ. 結び

17.イタリア文化と日本文化

紀元前 200 年頃に始まるローマ帝国は、地中海沿岸諸国を征服することにより、キリスト教文明及びギリシャ文明を取り入れ政治、文化、芸術を含めた一大帝国を築いた。その後中世の暗黒時代を経て、黄金のルネサンス期に花開き、北方のヨーロッパ諸国に広まり文化、芸術をリードし発展した。現在のイタリアは経済の低迷により国の力としては弱まっているが、今もなおイタリアの「衣食住」の文化は世界を魅了し続け、芸術は色褪せることなく世界中から観光客を惹きつけている。絵画、彫刻、建築、ファッションを始めとする美術作品、ミラノ・スカラ座でのオペラ、バレエなどの舞台に音楽。たとえ国力は衰えても芸術大国としてのイタリアの存在感は輝いている、というのがミラノに滞在した印象だった。

一方、日本は、極東の東端に位置する島国で、中国を中心とする大陸文明の影響下にあった。500 年程前にキリスト教を中心とする西洋文明が到達した際には、日本はその強い影響力を恐れ長い鎖国時代が続いた。その閉鎖的空間における文化の煮詰まりが、非常に独特な日本文化を作ったように感じる。とりわけ、縄文時代から始まる死者との対話、神話の創造、仏教の渡来とともに禅を中心とする精神性の高い宗教の発達など、独特の文化が形成された。江戸時代の政治的安定期に、人々は改めて日本の文化を回顧しながら美意識をさらに深め、また同時に学問の花が開いた。

この両国は、長い歴史の中でいくつかの直接的な出会いを経験している。とりわけ、イタリアで確立したカトリックの聖餐式の執り行われる様子は、日本の茶道の袱紗捌きなどの流れるような美しい作法に極めて類似している。例えば秀吉の時代の絵画に日本の茶人が、伴天連にお抹茶を入れている場面にある様に、既に相互の作法が響き合っていたのではないかと思った。また、現代の両国の間にも他人への気遣い、優しさという面については、共通の意識が流れているように感じることが、滞在中のいくつかの出来事の中で感じられた。

18・現地で得たこと、特に印象に残ったこと

ミラノでの半年間は、出発前に想像していたよりも遥かに楽しく充実した日々だった。私のミラノ滞在は、ブレラで始まりブレラで終わったように思う。様々な国々の人との出会いは、これまで以上に国という垣根を感じなくさせ、そして様々な文化、生活習慣の違いは従来持っていた常識という概念の幅を広げた。

しかし、海外生活の中で最も強く感じたことは、自分で変化したい、成長したいという気持ちがなければ、どこの国に住んでも結果は何も変わらないのではないか、ということだった。海外に行けば何かが変わるのではない。自分から積極的に行動し、違いや変化を受け入れていく柔軟な心が必要だということ。これは日本にいても同じだが、言葉の通じない外国ではより一層重要だと感じた。意思表示をしなければ誰も助けてくれない。誰かが気付いてくれるのを待っていても何も変わらない。こちらが心を開けば相手も心を開いてくれた。心をオープンにすること、物事を受け入れる柔軟な心、積極的な行動、感謝の心を持って前に進んで行くことで、未来は開けていくのだと、ミラノの生活の中で強く感じた。ブレラでの教授やクラスメイトとの交流、日常生活で感じた文化、生き方、考え方の違いに触れたことで新しい目が開いたように思う。

印象に残ったことは、イタリア人は総体的に素朴で優しい人が多く、挨拶を非常に大切にしていることだ。お店に入る時、レジでお会計をする時、必ず挨拶をする。昨今の日本では挨拶をしても返ってこないことがある。ましてや知らない人だった場合、より一層返事がない確率が上がる。イタリアではお店でも学校でも「Ciao！」で始まり「Ciao！」で終わる。笑顔で挨拶を交わすことで心が和らいだ。イタリアに来て改めて挨拶の大切さを再認識した。最近、「挨拶をする意味がわからない」という日本の若者が多いと記事で読んだ。言葉も理解できないミラノ生活で感じたことは、挨拶をすることで新しい扉が開いていくということだった。

19. 渡伊前と後の活動・心境の変化

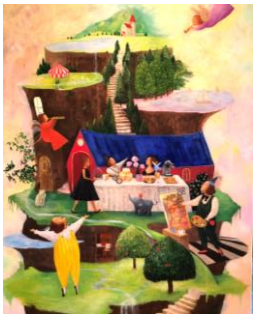
「真の芸術は永遠に続く」－Arcangelo 教授が私に贈ってくれた言葉だ。

このメッセージが今回のミラノ滞在で得たすべてを表しているように思う。

ブレラ国立美術学院でイタリア人の教授の授業を受けたこと、クラスメイトの作品、フレスコ画研究、日常生活での交流、イタリア文化、芸術を通して、イタリアを直に感じたことで、私の前に新しい世界が開けているように見える。欧米人は個性を尊重し、自分の表現、美意識を大切にする。とりわけ、イタリア人の"美"は感覚的な部分と構想的な部分が、非常にバランスが良いように思う。ミラノ滞在は、これまでの制作やこれからの作品を考える上で大変重要な期間となった。

また、茶道と着付けのワークショップを通して、想像以上に日本の文化に興味を持ってくれる人が多いことを実感し、日本文化をさらに学ぶと同時に世界の人々と交流することの大切さを改めて考えた。他人がしていないような私だけのワークショップを目標に、伝統的価値観を基盤に新しい発想を模索していきたいと思う。

＊渡伊前の作品



20、今後の制作活動の課題・方法

今後の課題は、

「白黒の画面から感じる色彩と感情との相互関係と、作品にもたらす相乗効果」

について、下記のことを研究したいと思う。

・感情によって白黒の画面から見えてくる色が変化すること、
・見える色の変化によって作品にどのような相乗効果が起こるのか
・色彩の持つ固定観念にとらわれず、鑑賞者の気持ちに寄り添う作品

＊渡伊後の作品

まだ方向性は明確に定まっていないが、これまでの表現方法とミラノで得た表現方法の融合を試みながら、いくつかのパターンを制作し、比較そして研究をしていきたいと思う。鑑賞者に寄り添う作品を目標に、ホスピタルアートに限らず家庭、職場、公共の場における「愛と癒し」のある絵を模索したいと思う。

21. 帰国

ミラノ出発の前日、クラスメイトが別れの挨拶に会いに来てくれた。半年間はあっという間に過ぎ、帰国することが不思議に感じられた。コロナ禍の滞在は、日本出発前からワクチン接種回数の問題、FFP2 マスクの用意、出発直前の PCR 検査など平常時とは異なることが多々あった。そして出発直前の 2 月 24 日にロシア・ウクライナ戦争が始まり、JAL 便は私が搭乗した 2 月 27 日の便を最後に、しばらくヨーロッパ便を欠航にした。飛行機は全乗客が 30 人弱だったと思う。不安なことも多くあったが、女子美同窓会ミラノ支部の古山さんが空港まで迎えに来てくれ、非常に心強かったことを昨日のように思い出す。現在は帰国 72 時間前の PCR 検査の陰性証明書は不要になったが、私が帰国する時は必要だった為、帰国前の一週間は自粛生活をした。飛行機は、ロシア・ウクライナ戦争の関係で出発時と航路が変更になり、ミラノマルペンサ空港からヘルシンキ空港を経由し南下した後、ユーラシア大陸を横断。トータル 19 時間の長旅となった。

最後に、コロナ禍のミラノ滞在を無事終えられたことに改めて感謝すると共に、お世話になった方々へ心より感謝申し上げます。